教職課程センター紀要　第8号　(1)－(5)ページ、二〇二三年一二月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.8 (1)–(5), 2023

研究ノート

高等学校の漢文教育に関わる一考察

―抑揚表現に用いられる例文の出典を追う―

A consideration on the teaching of Classical Chinese in high schools

Searching for the source of the example sentence used in the emphatic expression of Classical Chinese

浅見　和寿
Kazutoshi ASAMI

キーワード：漢文教育、漢文参考書、馬場武次郎、「禽獣且知恩、人安不知恩哉。」、「禽獣且知恩、況於人乎。」

一　はじめに

高等学校の授業で漢文を教える際には、本文中に出てくる様々な句法を紹介する。例えば再読文字を説明する時、「猶」という字は「なホ～ごとシ」と二度読む漢字で、過猶不及（過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし）というような例文があり、出典は『論語』であると説明する。また反語を説明する時、「安―ンヤ」は「いづクンゾ～ンヤ」と読み、燕雀安知鴻鵠之志哉（燕雀安くんぞ鴻鵠の志を知らんや）と例文を示し、出典は『史記』であると説明する。

以上のように二つ例を挙げたが、漢文の授業や学習をする時には、このように、句法やその例文、書き下し文や口語訳もセットで学ぶことが多い。その際、出典も明記し合わせて学習することも少なくない。実際、高校で使用する教科書では本文の出典を明らかにしている。

さて、そういった流れの中で、出典が不明な漢文に遭遇した。それは、「禽獣且知恩、人安不知恩哉。」である。この漢文は、抑揚表現の例文でとられているのだが、出典が不明なのである。調べていくうちに、日栄社から出版されている『句形整理　基礎からわかる漢文　新訂版』（馬場武次郎著）の中に例文が掲載されていることがわかった。また、似たような表現として、インターネット上にも類似の例文が出てくるが、どれも出典は明記されていない。これはいったいどの書籍から引用されたものなのか、また誰かが創作したものなのか。

本稿では、この「禽獣且知恩、人安不知恩哉。」がどこからきて、どのような形で現在に伝わっているのか。馬場武次郎氏の参考書を糸口として調査し、出典を見極めていくことを目的とする。

本来ならば、著者である馬場氏に直接お伺いするのが一番良い方法ではあるが、馬場氏は逝去されているため、それは不可能である。それ故、当時馬場氏と関係があった出版社や交流のあった方々に情報を提供していただきながら考察していく。

馬場氏が本学の卒業生であるということもあり、その人となりも含めて、本稿にて紹介し、調査の一端を示すことで、漢文教育を一歩前進させたいと考えている。

二　「禽獣且知恩、人安不知恩哉。」について

本稿で取り上げる「禽獣且知恩、人安不知恩哉。」について、現在確認が取れているのは、馬場氏の著書『基礎からわかる漢文〔新訂版〕』での記載である。抑揚の句形の解説部分にあり、ドリル（練習問題）として「全文ひら仮名の文になおせ。」の指示とともに掲載されている。

禽獣且知恩、人安不知恩哉。
きんじゅうすらかつおんをしる、ひといづくんぞおんをしらざらんや
鳥やけものでさえも恩を知っている。まして人間たる者がどうして恩を知らないことがあろうか（知らないことはない）。

解答には全文平仮名の書き下し文があり、参考に口語訳がついてある。しかしながら、出典の記載はない。（本書では、他の例文にも出典は明記されていない）ところが調べてみると、この例文と同じ抑揚表現の例文で羅列されていた漢文には、全て出典があることが確認できた。

①庸夫且知其不可、況賢人乎。
②義苟失矣匹夫猶且侮之。
③以菅公之賢猶不能無恋権之意。

①は『史記』②は『題蘭相如奉璧図』③は『日本外史』である。
このように考えていくと、「禽獣且知恩、人安不知恩哉。」にも出典があると考えるのが自然である。
ここで、馬場氏の他の参考書に「禽獣且知恩、人安不知恩哉。」の記載がないか確認する。馬場氏は日栄社の参考書の他に、学習研究社から『馬場の直前講習センター試験の漢文』と『精選・詳解漢文読解の公式』が出版されているが、どちらも、抑揚の句法には触れているものの、「禽獣且知恩、人安不知恩哉。」の記載はない。すると、馬場氏の参考書を出版した日栄社が何か事情を知っている可能性がある。

三　馬場武次郎氏について

出典が確認できないということを、『基礎からわかる漢文〔新訂版〕』の出版元である日栄社に確認とったが、次のような回答（メール）であった。

> 著者の馬場武次郎先生が、すでにお亡くなりになっており、また出版当時の編集者と、出版当時の編集についてわかる者が現在弊社におりませんので、出典は不明のままとなっております。

また同出版社から出ている『句形演習　新・漢文の基本ノート』にも、抑揚の形として「禽獣且知恩」が掲載されている旨を伝えたところ

> 『新・漢文の基本ノート』の該当箇所も、上記の馬場先生の本の例文をもとにしたものと思われますので、同様に出典は不明となっております。

との回答（メール）であった。確かに『基礎からわかる漢文〔新訂版〕』の初版は昭和五〇年四月二〇日となっているため、当時の編集者はいないことは十分理解できる。また馬場氏も逝去されているということで、著者にも確認することもできない。そもそも馬場氏とはいったいどのような人物なのか。
全く思いもよらないことであったが、この時になって初めて、本学の卒業生（大東文化学院　本科第二〇期生）であることを知った。（「大東文化歴史資料館だより」第八号より）また、『群流』（大東文化学院　国語漢文科　昭和一八年入学六〇周年記念の文集）にも寄稿されるなど、晩年も本学の活動に積極的に関わっていたことがわかる。（「大東文化歴史資料館だより」二四号より）
本学の国語漢文科の卒業生ということであれば、漢文に造詣が深いことも頷ける。また、インターネット上にも多くその名前が登場し、参考書の出版や、受験雑誌への寄稿、そして一橋学院で教鞭を執っていたことも、確認することができた。

馬場氏は、一橋学院の講師であり、ブログ等の記事から教え子の記憶にも強く印象に残っている名物講師であったことがわかる。本稿では、その中の一人である埼玉県立春日部高等学校長の上原一孝氏にインタビューした内容を掲載し、馬場氏の人となりを紹介させていただく。（インタビュー内容掲載了承済）

当時の馬場氏について印象に残っていることを伺った。

私は、東京・高田馬場にある一橋学院早慶外語という予備校に通っていました。

私は、馬場先生の古文や漢文の講座を選択していました。当時は、現代文で緒方啓郎先生と仲がとても良かったのを覚えています。馬場先生は古文、漢文の人気講師で、夏期講習などでは、大教室（定員百人）で立見の受験生がでるほどでした。受講者にとても説得力のある講義で、授業が終わると「わかった」という気になる講義でした。

服装は常にスリーピース。三つ揃えのスーツとネクタイを締め、風貌は川端康成にそっくりでした。

授業は、熱量あふれる授業で、今でも覚えているのは、「勉強は、しっかりと習慣をつけないといけない。駅員がホームで電車が行った後にホームから線路を指さし確認するように、五感を動員して学ぶことが大切です」と言われて、駅員のように「右よーし」「左よーし」と指先確認をされていたのが印象的でした。

今でも駅のホームで、駅員の指さし確認を見ると、愚直であっても習慣づけることの大切さを実感しています。

とのことであった。もちろん今回は、「禽獣且知恩、人安不知恩哉。」の出典を明確にすることが目的であるので、その部分も伺ったが、漢文を創作したという話は記憶にないということであった。

現在でも、馬場氏の姿を拝見できる動画が存在する。YouTube にアップロードされている「一橋学院早慶外語　馬場　武次郎」というタイトルで当時の一橋学院早慶外語予備校の説明ビデオ内で確認できる。

以上のように、馬場氏については、情報を集めることができたが、「禽獣且知恩、人安不知恩哉。」についての出典までたどり着くことはできなかった。ここからは、広く中国の漢文なのか、それとも日本漢文であるのか検討していく。

四　中国の漢文なのか日本漢文なのか

まずは、中国の漢文であるかを調査する必要がある。その際、「四庫全書検索」をはじめとする様々な方法（捜韻、読秀等々）で検索することになるが、見つけることはできなかった。また、ネット検索においても中国の「百度」を利用し、辞書系においても『大漢和辞典』『漢語大詞典』を中心に探してみるも発見することはできなかった。

日栄社の参考書に掲載されている他の例文を見ると日本漢文ではないかと推測できるが、それを考慮して検索し続けたが発見には至らなかった。

しかしながら、調査を続けていくと、ネット上に「禽獣且知恩、人安不知恩哉。」を見つけることができた。そのサイトは「Quizlet」というサイトで、個人が単語帳を作成でき、公開もできるというサイトである。そこに紹介されていたのである。その情報から、『基礎からのジャンプアップノート　漢文句法・演習ドリル　改訂版』旺文社にも同じ例文が掲載されていることがわかった。日栄社と同様に旺文社にも確認をとったが出典はわからないということだった。書籍の中でも出典は明記されておらず、日栄社のものより出版年が新しいため、根拠にすることはできないが、馬場氏と同様、受験参考書の中で発見されたことから、受験や漢文学習の中だけで存在している例文ではないかと考えることもできる。

また、探している例文とは多少異なるが、

禽獣知恩、而況於人乎。（禽獣すら恩を知る、而るを況んや人に於いてをや。）

禽獣でさえ恩を知るのだ。まして人ならなおさらだ。

という例文を「Try IT」という動画授業の中で使用していることもわかった。私が探している「禽獣且知恩、人安不知恩哉。」と比較すると、「且」の文字がなく、読点以降の文は全て異なっている。

この二つの発見を機に、「禽獣且知恩、人安不知恩哉。」は、受験参考書の類のテキストのみで流布されていたものではないか、また、そのままの形ではなく、いくつかパターンがあるものなのではないかと考え、漢文の参考書を中心に再度類似の例文がないか調査することとした。

五　「禽獣且知恩～」には様々なパターンが存在する

再度調査した結果、「禽獣且知恩、況於人乎。」の例文はいくつかの書籍の中で紹介されている。全て列挙することはしない（参考文献に記載）が、特徴的なものだけ紹介する。

まず『文検参考漢文典』である。この本には、「禽獣且知恩～」で始まる例文が三箇所にとられている。

強調の副詞文例

禽獣且知恩況於人乎。

逆説接続詞文例

禽獣且知恩而況於人間乎。

抑揚接続詞文例

禽獣且知恩、而況於人乎。

このことから、当時の漢文教育の中では「禽獣且知恩～」の例文は、説明する文法事項によって、読点や、文字の変化が許されていたのではないかと考える。それは次に挙げる例文からも同様のことが推測できる。

禽獣知恩、而況於人乎。

禽獣且知恩。矧於人乎。

どちらの例文も、『学燈　受験の国語　大学入試マガジン』に掲載されている。「禽獣知恩、而況於人乎。」は一九七三年八月に、「禽獣且知恩。矧於人乎。」は、一九八六年一一月に掲載されたものである。

以上のことから考えると、「禽獣且知恩～」の例文は、ある程度形は似かよっているものの、微々たる変化が許容された例文ということがわかる。

六　「禽獣且知恩、況於人乎。」は広く流布していた

調査の結果「禽獣且知恩、況於人乎。」が基本の形であったと考えられる。なぜ、「禽獣且知恩、況於人乎。」が基本の形だと判断したかというと、この形で掲載されている書籍が圧倒的に多いからである。そしてそれが一般的に流布していたことがわかる記述がある。兵庫県立第三神戸中学校校友会が昭和一二年に出版した『国に尽す道』では次のようにある。当時三年生であった学生が「時局所感」というタイトルで書かれたものである。

支那は日本に対して恩こそあれ仇はないのである。「禽獣且知恩、況於人乎」とは誰が言ったのか。（一部抜粋）

とあり、この例文を引き合いに出し書かれている。

また、内村鑑三もイザヤ書研究の中で、次のように記している。

牛は其持主を知り、驢馬は其主人の供する槽を知る、然れどもイスラエルは知らず、エホバの民は悟らない。禽獣且恩を知る、況や人に於てをや。然れども事実は然らずして、恩を知らざる事に於て人は禽獣に劣るのである。（一部抜粋）

このように「禽獣且知恩、況於人乎。」が一般的に使用されていることからみても、この形が基本だったと考えられる。

七　まとめ

本稿では、「禽獣且知恩、人安不知恩哉。」の出典を考察してきたが、出典を見つけることができなかった。しかし、「禽獣～」の例文には、様々な変化形があり、「禽獣且知恩、人安不知恩哉。」はその一つではないかと考える。そのように考えていくと、現在のところ、参考書の刊行年から鑑みて、馬場氏が創作したものではないかと推測することができる。今後、昭和５０年より以前に、「禽獣且知恩、人安不知恩哉。」が存在するかどうか、引き続き調査研究を進めていく。

《参考文献》
小山左文二『模範漢文通解』　1年上　東京辞書出版社　一九二一年（四八頁）
須藤伊助『文の解剖と漢文典の研究』啓文社書店　一九二九年（一六頁）
『内村鑑三全集 第四巻』　岩波書店　一九三二年八月（四二一頁）
遠藤隆吉『中等漢文読本改纂 入門篇』帝国書院　一九三六年（三四頁）
北村沢吉『漢文法助字要訣』中文館　一九三六年　（三八頁）
佐々木藤之助『文検参考漢文典』啓文社　一九三七年（九九、一二九、一三三頁）
大東文化協會　編『皇國漢文讀本　新教授要目準據 入門篇　訂正再版』東京開成館　一九三七年　一一月（一二二頁）
加藤盛一『漢文縦横　学習受験』甲文堂書店　一九三七年（一四頁）
星兵三郎『漢文独習読本』吉川弘文館　一九三七年（一三五頁）
兵庫県立第三神戸中学校校友会『国に尽す道』一九三七年（一五三頁）
正文館 編『女子漢文自習書』正文館書店　一九三八年（三五、五一～五三、五五頁）
堀書店編集部 編『中学高校国語学習便覧』堀書店　一九五〇年（一五三頁）
久保悦雄[他]『漢文必携 再版』愛知学院出版部　一九五一年（六一頁）
淺尾芳之助『基本要項漢文の入門』有精堂出版　一九五二年（六三頁）
内野熊一郎　小沢文四郎 共監修『必修国語漢文力問題選』敬文社　一九五二年（八三頁）
前田治男『総合国語研究要覧』櫻井書店　一九五三年（三〇八頁）
『学燈　受験の国語　大学入試マガジン』學燈社　一九七三年　八月
一九八六年　一一月
一九九一年　三月
一九九三年　二月
『高一コース』四(九)　学習研究社　一九六六年一二月
馬場武次郎『句形整理　基礎からわかる漢文　新訂版』日栄社
一九七五年四月二〇日（初版）
馬場武次郎『句形演習　新・漢文の基本ノート』日栄社
一九九八年二月二〇日（初版）
馬場武次郎『馬場の直前講習センター試験の漢文』学習研究社
一九九六年一一月（初版）
馬場武次郎『精選・詳解漢文読解の公式』学習研究社　二〇〇〇年三月（初版）
《参考 WEB サイト》
「Quizlet」（https://quizlet.com/latest）
「Try IT 」（https://www.try-it.jp/）
「YouTube　一橋学院早慶外語　馬場 武次郎」
（https://www.youtube.com/watch?v=Bqyju8v6ORk&t=120s）

本稿の漢文には、返り点送り仮名を省略した。